
真・恋姫無双 碧き龍

霸王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 碧き龍

【Nコード】

N8173U

【作者名】

霸王

【あらすじ】

三国時代の『乱世の奸雄』曹孟徳。彼女には自分より優れている兄がいた。しかし、兄は家督を継がず旅に出た。そして10年後その兄が返ってくる。10年の謎を隠したまま

はじまり(前書き)

長い旅に出た曹覇

ついに故郷陳留に帰る途中色々なことに巻き込まれる。曹覇は無事陳留へ帰れるのか？

はじまり

(お兄ちゃん。どこにいくの??)

「(君はだれだ??)」

(いっちゃやだよ。私のトコにいて)

(ごめんな。・・・)

(えっぐ。おに、おにい、お兄ちゃんの・・・バカアアア!!)

「(これは・・・。そうか、10年前の俺と華琳)」
夢を見ていた俺はそっと目覚ました。

SIDE: 刃

あの夢を見てから10日ほどが経ち俺とバカは俺の故郷陳留に
向かって歩いている。

「ねえ、刃^{やいば}。今さっき私の事バカにしなかった?」

「そんなことないぞ。気のせいだろう」

嘘です

「ホント〜。正直に言わないと三枚に下ろしちゃうぞ」

彼女が舌を出してかわいい子ぶりするが、そこは無視して陳留へ
向かう俺。ついでに俺の名前は性は曹。名は霸。字を子候^{しこう}。真名を
刃^{やいば}と言う。

「ねえ〜。ホントに本当に三枚に下ろすよ」

そして、今も俺の腕に抱きつきながら恐ろしいことを言っている
女性は、性は司馬。名は懿。字を仲達。真名は蒼理^{そうり}と言う。あの有

名な司馬家の長女がどうしてこんなところには??え!!お前もそう
だろって、それもそうか。まあ、そのへんはいつか話そう。

それより今の俺と蒼理の行動を見ていると

「おい、お前ら。有り金全部俺様達に渡しな」

賊が出てくるな。

「聞いてるのか!!」

「聞かないと殺すんだな」

「さっさと言うことを聞けよ」

ヒゲとチビとデブが剣を持って脅してくる。しかし残念。お前ら
とんでもない時に来たな。

「私と刃の時間を取らないで」

「「ヒイツ!!」「」」

ほら、般若という蒼理が出てきた。

彼女は持つてる剣で三人の賊の剣を一瞬で切り落とし逆に脅して
いる状態になる。ほんと蒼理は強くなつたな。

「ねえ、刃。こいつ等どうする?? 頸を跳ねる??」

「いや、今回だけは見逃してやろう」

その言葉を聞くと三人は笑顔になり俺に何回も頭を下げた地平線
の彼方へと去って行った。

「そろそろ出てこいよ」

俺は後ろにある大きな岩の方に殺気を当てる。すると岩の陰から
三人の女性が出てきた。

「まさか気づいておられましたか」

紅い槍を持った白い服を着た女性が俺のそばまでやって来た。

「いやいや。お姉さんお強いですねえ」

とても眠そうだなこいつ。それに頭に乗ってるのなんだ??

「ぐう〜」

寝た！！本当に寝たよ！！確かにこの日向なら眠くもなるが今の状況考えろよ。

「風。起きなさい」

「おお！！ついこの陽気に誘われて」

やりなれてるな。

「それで、貴女達も私と刃の時間を取るの??」

蒼理。お願いだから御構い無く殺気を出すのは辞めよう。まずは、話し合いからだよ。

「蒼理。武器を置け」

「なんでよ！！」

「いいから置け！！俺の言うことが聞けないのか」

俺が怒りぎみに蒼理に言つと蒼理はすぐさま剣を置いた。

「悪かったな」

「いえいえ。私共も逢いk「違うから」おっと！！そうでしたな」

何を言ってるんだこの人。ん??あの人さつきからぶるぶると震えているぞ。

「ブウウウウ！！」

「ウギヤア！！」

俺の体に赤い液体が命中する。

「おやおや。星ちゃんとお兄さんの会話で稟ちゃんも妄想が始まっ
つてしまいましたか」

「まさか、これ」

「想像通り鼻血ですよ。稟ちゃんは妄想癖である領域をたつすと鼻血を出すのですよ」

「明らか致死量だよね」

「生きてるの??」

蒼理が持つている剣でその子をツンツンと突く。突かれて彼女はビクツツて反応した大丈夫だろう・・・多分

「平気ですよ〜」

「いつものことだからな」

こいつ等ろくな死に方をしないな

鼻血つ子が復活しようやく自己紹介ができた。

「俺は曹覇、字を子候だ」

「私は司馬懿、字を仲達」

「私は趙雲。字を子龍。司馬懿殿とは後程手合せを願いたいですな」

「わたしは戯志才と言います」

「風は程立、字を仲徳と言います。それと、お兄さんはもしかして陳留で勅使をしている曹操さんの親戚ですか??」

「か、曹操は俺の妹だが」

「おお!!曹操さんのお兄さんでしたか」

「しかし曹操殿にはご兄弟いたとは」

「訳有りだね。俺は曹家の跡を継がなかったんだ」

「そうでしたか。それでこれからどちらに??」

「今から陳留に帰るところさ」

「そうなのですか」

「そうなのですよ」

「なら、風達は旅の途中なので」

「なら、旅の無事を祈って」

俺は腰に掛けていた剣を持ち鞘から少し上げて元に戻した。

「それは??」

「ちよっとしたおまじないかな」

「刃がそれをするなんて」

「蒼理、ひどいな」

「それでは」

「ああ、いつかまた」

三人と別れ俺と蒼理は陳留へと向かった。

「（華林。今戻るからな）」

妹の思い（前書き）

着々と乱世の準備をしながら旅立った兄を待つ
兄さんあなたはどこで何をしているの??

妹の思い

『妹の思い』

はあ〜。最近私は兄さんの別れの夢を良く見る。

私には兄さんが一人いる。名を曹子候と言い私よりも文武の才があり母の跡を継ぐのは兄さんだと思っていた。しかし、兄さんは母に一つの剣を渡し旅立って行った。そして、兄さんの側近だった秋蘭を私が一応引き取り私の家臣とした。けど、秋蘭の本当の主は兄さんであることは私も姉の春蘭もわかつている。

「華琳様。どうかしましたか??先ほどから溜息を付いておられますが」

「なんでもん・・・」

兄さんの事だから秋蘭にも話したほうがいいでしょうね。

「兄さんの事を考えていたの。最近夢に良く出てくるから」

「刃様ですか・・・今頃どこでなにをしているのでしょうか」

「そうね」

「ねえ、秋蘭。そいつは誰よ??なんで華琳様が男の事で溜息つかなければならぬのよ!!」

桂花

彼女は最近軍師として入った子。私を試し遠征で大きな功績を上げ今ここにいる。もちろん閨でも私のかわいい子猫

「刃様は華琳様の兄だ。それと、桂花・・・刃様の悪口は私が許さない」

「うう・・・」

兄さんの悪口を聞いて秋蘭が殺気を出す。さすがにこの殺気では桂花が可哀想ね。けど、泣き顔の桂花は可愛いわね。

「秋蘭。その殺気を早く治めなさい。いくらあなたの主が兄さんでも桂花は兄さんの事を知らなかったのだから今回は大目に見なさい」

い

「・・・わかりました」

「桂花もわかったかしら」

「・・・はい」

それにしても秋蘭の言うとおり、兄さんはどこで何をしているのかしら??

「ハツクシユ!!」

「刃、風邪?? なんなら私が暖めてあ・げ・る」

「それで、なぜ脱ぐ!!」

「だって遭難した時は人肌で暖めあうもんでしょ」

「俺は遭難もして無いし風邪でもない。ただ、おそらく華琳が俺のことを考えていただけだ」

「なぜわかるの??」

「勘だ」

「そんな自信満々に言われても・・・」

陳留

『陳留』

「なかなか賑わってるな」

久しぶりに帰ってきた陳留は、俺が出ていった時よりも騒がしく。町の人達は笑顔で一杯だった。

「それが、久しぶりに帰ってきた現当主の兄の言葉かな?？」

「別にいいじゃねえ。それより彼処の拉麵屋入るうぜ」

俺は蒼理の手を繋ぎ店の中にはいった。

中は昔と変わらず大賑わいで、店の看板だったオバチャンの声が店の中に響いていた。

「いらつしやい!!何名様……」

「久しぶり。相変わらず元気だね、オバチャンは」

「曹覇様!!お戻りになられたのですね!!」

オバチャンの大声で店の中にいた客が一斉に俺の顔を見た。俺

の顔を見て喜ぶ人や不思議がる人もいるが無視無視。

「このこの拉麵の味が忘れられなくてね」

「いやだい。そんなお世辞言ってもなにもでないよ。あんた、

拉麵と餃子二人前だよ」

出てる。笑いながら出てるよオバチャン。

「それで、隣にいる子は曹覇様の嫁かい??中々の美人を貰っ

て

「えっノノノ夫婦に見えますか??」

「違うのかい??あたしはてつきり嫁かとおもって間違いないありません!!」やっぱりね。これで、陳留も安泰だわ」

「ち、違いますよ。蒼理は旅の途中偶然知り合って」

「もう、刃たら。昨日もアンナコトやコンナコト……」

「してないから。俺なにもしてないから」

「真名まで呼び合うかなんて、曹操様が知ったらどうなる事やら」

「怖いこと言わないでください！本当になにかあるみたいじやありませんか」

「それで、もう曹操様には会ったのかい??さすがに会わずにこk「会ってません」……へ??」

「だから会ってません。陳留に着いたのはさっきだし門兵は俺の事知らないヤツだったから何も疑い無く入れたから」

「とうとうこの店も終わりだね」

「なぜ!!」

「曹覇様。それでしたら先に曹操様に会ってあげてください。

あの人は曹覇様が旅に出るから三日三晩泣いてらしたので」

その話を聞いて俺は顔を暗くした。例え今後の為だとはいえ妹の華琳を置いて旅だつて行ったのだから。例えそれでこの旅を後悔しているかと聞かれてもしていないと言い返す自信はある。それだけの事を俺はしてきたのだから。

「だから、一刻も早く曹操様に会ってあげな」

「そうします。拉麵はまた近い内に……蒼理行くぞ」

「ふあい」

君はいつの間に拉麵を食べていたの??

「今日の添い寝なし!??」

「そ、そんなあ〜」

再会（前）

『再会』

店のおばちゃんに言われて城に向かうことにした俺は正直に言うてなんて浅はかな行動をしたんだろう。おばちゃんの言う通り俺は華琳を悲しませたはずなのに・・・クソ！！

「刃。怖いよ。そんなに殺気を出すほど私のこと嫌いになったの？？もう、刃が寝ている間に枕代えたりしないから許して」

「違う。ただ、自分の不甲斐無さに苛立って・・・・・・蒼理、今なんて言った？？」

「殺気を出すほど」

「違う。その後」

「・・・・・・」

「いつ、目をそらしやがった。」

「あ~~~~い~~~~じ~~~~」

「ごめんなさ~~~~い~~~~い~~~~」

「くら、まちやがね!!--」

.....

「ハア、ハア、ハア・・・」

蒼理を追いかけて一刻。

どうにか蒼理を捕まえて城門の前まで来ている俺だが、なぜか蒼理^カが陳留の裏道まで知っていて捕まえるのに時間がかかった。

「すまんが曹孟徳殿に会いたいのだが」

「どの様な用件だ」

「本人に直で話したい」

「……少し待て」

門兵が別の兵に伝令に行かせ用件を伝えに行く。さすが華琳だ。その辺は確りとしている。俺と蒼理は伝令に行った兵が帰ってくるまで門の前で待った。

S I D E : 華琳

「華琳様。そろそろ休憩にしましょう」

「そうね。秋蘭、お茶の準備を」

「はい」

秋蘭の提案で少しばかりの休憩にはいる私達。その時兵士の声が聞こえた。

「失礼します。さきほど曹操様にお会いしたい方がお越ししました。どうぞします」

「そんなの追い返しなさい。華琳様はついさっき休憩に入ったばかりよ。そんな馬の骨なんかに華琳様の休憩を裂くわけにはいかないの」

「その者の名は??」

桂花は不機嫌に兵士に答え秋蘭は訪問者の名前を聞いた。これじや、どっちが軍師かわからないわね。そんななか兵は秋蘭の質問に答えた。

「名は名乗りません出した。内容も本人に直接話すと申しております。どうなさいます??」

「名乗らないのは怪しいわね。その者の格好はどんなのかしら??」

「髪は曹操様と同じ金髪でした。あと付き人に女が一人」

「なら、玉座に案内しなさい」

「華琳様!!」

「桂花。あなたは私の答えに口答えするのかしら」

「い、いえ。滅相ありません」

「ならいいでしょう」

「御意」

兵が相手の名を名のらなつかたと聞いた時なぜ私は会わないといけないと思っただろう??普通なら追い返すところなのに。それが反対に今会わないと一生会えない気がした。

玉座に行き左右に春蘭、秋蘭を置きその二人が来るのを待った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8173u/>

真・恋姫無双 碧き龍

2012年1月14日10時47分発行